

後悔の気持ち

大阪教育大学附属平野中学校 二年

夫馬 綾香

「大丈夫？」心配そうに母が私の顔をのぞき込んで聞いた。私は軽くうなずいた。

さっき電車の座席に座っていると横のドアから白杖を持った女性が乗り込んできた。

私は立ち上がり

「ここに座ってください」

と声をかけた。

「ここで大丈夫です。ありがとう」

女性はそのままドアのところに立っていた。隣に母が座っていたので私は元の席に座り、居心地の悪い気持ちでうつむいてしまった。そんな私を見て母が声をかけてきたのだ。

私は小学校の時に「視覚障がい体験」をしたことがある。階段を目隠しして上り下りするという体験だ。毎日使う階段なのに目の前が真っ暗だと足がすくんで一步を踏み出すのがとても怖かった。その時に手を引いて声をかけてくれた友達の声にすごく安心した覚えがあった。だから白杖を持った女性を見て、迷いもなく立ち上がったのだ。でも、結局元の席に座って、声をかけた事を少し後悔していた。

すると母はこう言った。

「さっきの女性はすごいね。きっと毎回同じ場所に立っているからあの場所で立っている方が降りやすいんだろうね。」そうか、私は困っていることを前提に考えて声をかけたけれど、そうではない時もあるんだ。「大丈夫です。」と断られたことは落ち込むことではないような気がした。

続けて母は数年前に起きた視覚障がいのある方がホームから転落して亡くなった事故の話をしてくれた。

「その時に今の綾香のように声をかけてくれる人がいたら事故を防げたかもしれないね。」と言った。そうだ、私が声をかけずにもしさっきの女性が転んだりしていたら、きっと声を

かけなかった事を後悔しただろう。さっきは声をかけたことを少し後悔したが、きっと声をかけなかった時の方が後悔の気持ちは大きかったのかもしれない。

私の住む大阪市もホームドアのある駅が増えてきた。でも、まだまだ危険な駅はたくさんある。街中を見ても視覚障がいのある方に安全な街とは言えない。点字ブロックに自転車が停められていたりする。危険なことに気が付いて声をかけられるのは私たち、人しかいないんだ。私はこれから困っているかもしれないと思ったら声をかけようと思う。後悔しないように。